

二〇二五年度 入学試験問題 帰国生

国 語

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから十ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の「文章」は編集者として絵本の出版に長年携わってきた児童文学作家・松居直のもの、「鼎談」(三人が向かい合いで話をする事)は松居直に加えて、臨床心理学者の河合隼雄、ノンフィクション作家の柳田邦男の三人が「絵本の言葉」について話し合っているものです。これらを読んで後の問いに答えなさい。

【文章】

この現代の今という時点にたつて、絵本を考えてみる意味は何だろう——ということを考えることがあります。あまりに絵本の内側にかかわりすぎて、かえって絵本を見あやまつているのではなからうか——といった不安をもつこともあります。あまりにも断片的な知識の詰め込み教育が多く、時にはそれを目標に努力が行なわれているのを見聞きするにつけ、絵本もそうした傾向を助長するのに使われているのではなからうかと思うこともあります。自然とかカンサツとか、カリキュラムに準拠しているという名目で、断片的知識やイメージが提供されているのをみると、情報を送り込まれるとその範囲内で答えをだしたり計算をしたりするコンピューター的人間がますます多くなるのではなからうかと、余計な心配をしたりします。コンピューターというのは創造性やオリジナリティーとはおよそ縁遠いものであり、暖かさややさしさを全く感じさせぬものです。私が絵本の中で特に大切だと考えているのは、絵本の中に盛り込まれている知識や情報ではありません。言葉です。

最近特に、言葉の存在感や実体が稀薄になり、**A** 言葉がたれながしのようにあふれていると思うことが、タえずあります。⁽¹⁾ 言葉がヘドロ化しているのです。⁽²⁾ はじめに言葉があつたというその言葉が失われたときに、存在はなくなります。あなたの言葉がありますか。あなたの言葉はどんな言葉ですか。どんな重さですか、どんな色でどんな形ですか。暖かいですか、冷たいですか。そんなばかなと思わず、一度あなた自身の言葉をいねいにとりだして、よくみてください。ヘドロ化してはいませんか。

絵本の良し悪しは、その絵本の中に、どれほど豊かな言葉、中身のある言葉、存在感のある言葉、読み手や聞き手が心から共感できる言葉があるかによりきまります。**B** そういう言葉はまた、豊かで確かなイメージを形づくってくれます。

前に私があげた絵本のリストの中で、言葉というところに特に焦点をあ

て考えてみますと、『かばくん』『おやすみなさいのほん』『かみさまのほん』の三冊は、特に耳から子どもに言葉をかたりかけようとしている絵本です。『かばくん』は三、四歳児にもっとも適当だと思われる絵本で、事実その年齢の子どもがとても喜びます。その原因の一つは、『かばくん』の言葉です。作者の岸田裕子さんは、現代日本の詩人の中でも、特に音感の豊かな言葉の世界を表現できる詩人です。この『かばくん』の文は、普通の散文ではなく、詩です。さし絵を別にして、文だけを声に出して読んでみてください、それが美しい、豊かなりズムをもった、やさしいユーモアのにじみ出たすばらしい詩だということがわかりいただけるでしょう。

絵本は数多く出版されていますが、ほんとうに文章の質の高いものは決して多くはありません。あつても三、四歳児がすらっとはいり込め、しかも質の高い文章の絵本はまれです。

幼児の言葉の体験には、いろいろの質の言葉があります。たとえば日常生活の中で、親や先生、あるいは友だちとかわす会話の中の言葉があります。テレビなどが話しかける言葉があります。絵本や童話を読んでもらったり、昔話を聞くとときの言葉があります。この最後の言葉は、前の二つとは違う書き言葉で、多くは文学的な質の言葉です。このどれもが大切なのですが、三番目の文学的な書き言葉の体験をもっとも大切にする必要があるとおもいます。とりわけこの中でも詩による言葉の体験を豊かにしたいものです。

書き言葉の中には、科学的、論理的な言葉の世界もあり、これも五、六歳児ぐらいからは大切にしなければなりません。

文学的、詩的な言葉の体験の豊かさ、貧しさが、幼児の場合特に大きな差としてありはしないでしょうか。幼児期にこの言葉の世界を通り抜けずにすごしますと、想像力や理解力という点で、非常に貧しくなると思います。また特に詩の言葉から体得する言葉のリズム、ひびき、イメージのつながり、その中にある楽しさ、ころよさといったものは、言葉の音的な部分に対する鋭い感覚を育て、それが言葉を生き生きと使うことができる力に発展するでしょう。現代はあまりに散文的に言葉が使われすぎます。言葉が貧しくなりました。言葉の貧しさは、表現の貧弱さを意味し、それは創造力の衰退をもたらします。

三、四歳児に、特に言葉の豊かな絵本を与えることが何より大切です。繰

り返し繰り返し読んであげることです。三、四歳児のころは、こまかい言葉の意味や理解よりも、言葉のおもしろさ、楽しさといった感覚的なものを大切にしたいと思います。昔の人は、読書百遍義自ら見る^{おのずか}といいました。幼児の場合そのままではまるわけではありませんが、幼児はよく楽しい詩や言葉や文をつかりそのままおぼえ込んだりします。それがやがて意味を獲得^{かちとく}した場合、その言葉はいちばん強くその子どものものになります。

わらべうたの絵本なども、歌としてうたうだけでなく、わらべうたを読んで聞かせることもあってよいのです。わらべうたには日本語の鋭い感覚があふれています。こころみに岩波文庫の『わらべうた』という本を読んできて下さい。そしてわらべうたから多くのものを学び^うキュウシユウした北原白秋の童謡^{どうよう}を読んでみて下さい。白秋の童謡のアンソロジーとしては、『からたちの花がさいたよ』があります。まず保育者のひとりびとりが、自分の内にある日本語をもう一度吟味^{ぎんみ}して、その中身の豊かさを大切にしないと、幼児の言葉の教育はできません。

(松居直『絵本とは何か』)

【鼎談】

河合 今日テーマは「絵本の力」、また「絵本の可能性」ということです。僕^{ぼく}が絵本を取り上げたいと思ったのにはいろいろな意味があつて、まず子供のほうからいうと、日本の場合、子供に対する知識の詰め込みということがどうしても強過ぎて、知識をたくさん早く詰め込まれた者が勝ちみたいにいるのだけれども、子供時代というのはそういうことではなくて、もつと情緒^{じょうちょ}的なものとか感性的なものとか、そういうことのほうが大事なのです。その点では絵本というのはまさにそのとりの素晴^{すば}らしいものなので、もつと日本の子供たちに見てほしい、読んでほしいという気持ちが強いということがあるわけです。

これは松居さん以後でお聞きしたいのですが、僕の見ている限りでは、日本の絵本というのは世界の中でもすごく水準が高いのではないのでしょうか。というのは、**C** 心理学や哲学^{ていがく}の本で日本人が書いたものがアメリカとかヨーロッパへ翻訳^{ほんやく}して売れるものがあるかと言いだしたら、なかなかないじゃないかということになる。ところが絵本はたくさん訳されていて、僕も外国へ行ったら面白いから児童書を売っているところへぶらっと見に入りますが、たくさん日本の絵本があつて、そのときに感じるんです。

日本人の可能性という問題もすごくこのことに関わっていると思うんです。

それからもうひとつは、⁽³⁾ 絵本が大人にとって非常に大事なものだということ。これはいま子供について言ったこととも関係してきますが、どうしても日本の大人というのは追いつけ追い越^こせでやっているから、本来的な豊かさが無いようなところがある。そういう点で僕はビジネスマンに絵本を読めとよく言っているのですが、そんなふうに読者層という点でも絵本はまだまだ拡^{ひろ}がっていき、その意味が非常に大きい。

それは、もうひとつは、いまIT革命ということがありますが、その考え方のもとには自分が対象の外側に立って自分が操作する、ということがあります。そうすると何でも片手でできるというか、そういうことばかりが求められて、それがいま世の中にあふれている。それに対して絵本というのは片手ではできないのです。本当に自分がめくって、自分が入って、自分という存在がそれに関わって見ていくものですから。そこに字でなく絵もあるわけで、そういう意味でも絵本は現代的な意味が高いし、新しい可能性もあるのではないか。絵本をめぐってそんなことを考えたいと思ったわけなんです。

松居 最初に河合さんがおっしゃった知識の詰め込みということ、私はそれにもう最初から反発したんです。私の編集方針というのは、ひとつは、絵本は子供に読ませる本ではない、大人が子供に読んでやる本だということと、もうひとつは、役に立つたことになる本はつくらないということがはつきりと当初からありました。じゃあ、どうして科学の本をつくるのかとよく言われるのですが、科学の本も知識と情報を伝えるためのものではなくて、子供がびっくりすればいいんだ、子供が驚^{おどろ}いたり感心したり、へえーと新発見したりすればいい、ということなんです。子供の気持ちが動かないのでは絵本の意味はないと思うんです。

D 今の教育は頭に詰め込むことが中心で、そういうことで育ったすごく成績優秀^{ゆうしゅう}な人がいます。けれども、そうしたとても優秀な人と話している時、なにか気持ちが動かないんですね。表情がないし、話し方がとてもヘイバンだし、そしてこの人は何を感じているのだろうかというのがわからない。頭の中ではなく心の中にどんな言葉があるのかと、私は思うんです。

そういうことを考えると、絵本で子供たちの気持ちが動けばいい。要は楽しいか面白いかということだと思います。私はそれにこだわ

続けているんです。

柳田 いま河合さんも松居さんも大人が読むものとしての絵本という点を非常に重視されているのですが、私の場合、おくれればせながら最近絵本を再発見してのめり込んでいる、楽しんでいっているという、その真只中（まただなか）にいます。絵本に「トウシする本代」というのがこの頃（ころ）だんだんふくらんでいて、絵本ってけっこう重いから、一度に十冊ぐらい買って袋（ふくろ）でさげて電車で帰ると、肩が痛くなる（笑）。でもやっぱりその楽しさには代えられない重さなんです。

私の中での絵本の面白さを分類すると二つあるんです。一つは昔、子どもに聴かせてやった本をもう一度読んで、懐かしく楽しみながらその意味とか感動を再発見して、そのことに自分が心を揺さぶられるというのと、もう一つは、この二十年余りの新作に触れることによって、こんなにも絵本の世界というのは次々に創作が行われいい作品が提供されているんだというのを見て驚くということです。この二十年余り、なんと自分はこのすばらしい世界を見過ごして無駄な人生を過ごしてきたのかとさえ思ってしまう。子どもが小学生になって以後の、私の三十代半ば以降から五十代半ば過ぎまでの二十年間ぐらいが絵本との接触（せつしよく）のブランクになっていて、それですごく人生を損じたなと思います。そのあいだ片方でもう少しじっくりと絵本を楽しみながら仕事をしてきたら、自分の表現活動の中身はかなり違ったものになっていたと思います。そんな意味で私は現役（げんえき）のビジネスマンにしろ主婦層にしろ、あるいは人生後半に入った人たちにしろ、絵本が魂（たましい）の肥（こ）やし、あるいは魂（たましい）の「X」になる大きな存在だと思っているんです。

私はノンフィクションの作品や評論をずっと書いてきたのですが、ノンフィクションの作品を書いていると言葉数がやたら多くなって、一所懸命（けんめい）理屈（りくつ）をつけたリ解釈したり、考えれば考えるほど字数が多くなって何万語という言葉を費（つ）やすのですが、時折ふっと、それによって人生のほんとうにいちばん大事なもののや魂の部分にどこまで触れたのかと思ってしまうんです。人間の魂レベルのコミュニケーションにどこまで関わり合えるのかということになると、自分でぎよつとするほど反省（はんせい）するところが多い。

それに比べて、絵本というのは本当に少ない言葉や絵の数、標準的にいえば、十数枚から二十枚ちょっとぐらいの絵の数、そこに添えられたほんのわずかな言葉で、なにかいちばん大事なことで、人生について、命について、

155

150

145

140

135

130

生きることについて、喜びや感動について、それがズンズンと伝わってくる表現ができる。これはすごい表現手段だしコミュニケーション手段だと思います。そのあたりのことを私は今もういっぺん根源的に考え直しているところなんです。

河合 それはもうおっしゃるとおりで、柳田さんのような方がそういうことを発言されるから非常に心強いです。僕は大人の本を読まないほうの人間だから、子供の本を読んでは喜んでただけ（笑）。

柳田 最近電車の中で絵本を読んでいますと、怪訝（けげん）な顔で覗（のぞ）かれたりするんです。もう髪の毛が白くなった男がしきりに電車の中で絵本を読み込んでいたりすると。

松居 写真に撮（と）りたいな（笑）。

（河合隼雄・松居直・柳田邦男『絵本の力』）

★はじめに言葉があつた……新約聖書「ヨハネによる福音書」の冒頭（ぼうとう）の一節。「言（ことば）は神と共にあつた」と続く。

問一

——(1)「言葉がヘドロ化している」について、次の問いに答えなさい。
(→)「言葉がヘドロ化する」とありますが、どういうことですか。「ヘドロ化」が起きている背景について説明しつつ、三行以内で説明しなさい。

(二)

【鼎談】のなかでは【文章】の——(1)「言葉がヘドロ化している」に関連する議論が行われています。【鼎談】のなかから、(a)ヘドロ化している表現についての説明と、(b)ヘドロ化していない表現についての説明をそれぞれ見つけ、「…表現。」に続くようにそれぞれ(a)は三〇字以内、(b)は六〇字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問二

——(2)『かばくん』『おやすみなさいのほん』『かみさまのほん』とありますが、なぜ筆者はこのような本を読むことを良いとしているのですか。三行以内で説明しなさい。

170

165

160

問三

——(3)「絵本が大人にとって非常に大事なものだということです。」とありますが、なぜですか。【鼎談】の内容を踏まえて三行以内で説明しなさい。

問四

A ☐ D ☐ に入れる語としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上使えません。)

ア そして イ たとえば ウ まるで エ でも

問五

X ☐ にあてはまる「活動のための活力の源泉、ささえとなるもの」という意味のふさわしいひらがな二字(漢字一字でもよい)を入れなさい。

問六

——ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問七

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 【文章】の筆者は編集者として絵本を制作する側にいたために、現代社会が断片的な知識の詰め込みに終始し、その知識の範囲でしか答えを導き出さなくなっていることに気付かず、いたことを反省している。

イ 『からたちの花がさいたよ』に収録されている北原白秋の童謡は日本古来のわらべうたから多くを学んで作られているが、わらべうたにある言葉のおもしろさや楽しさといった鋭い日本語の感覚が見られない。

ウ 情報化社会の中で人は対象の外側にいて思い通りかつ簡単にものごとを操作することを求めているが、一方で絵本はそれとは全く逆に、字を読んだり絵を見たりして絵本の内側に入っていくものである。

エ 【鼎談】では、河合は自らの考えを述べずに議論の進行役に徹しており、松居は絵本制作で重視すべき点を述べ、柳田は大人が絵本を読むことの意義を語っているが、三人とも絵本の魅力は熟知している。

2 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

宮城県みやぎけんの港町に暮らす高校二年生の織月小羽（私）は、心を病む母の介護と家事に忙殺されているが、最近、東京からやってきて近所の中華料理屋で働いている浅倉青葉という二十六歳の女性が、母親の世話や家事を手伝ってくれるようになる。

青葉さんは寝室にいるお母さんに声を掛けてから、すぐに家事に取り掛かった。洗濯物を畳んだり、部屋に掃除機を掛けたり、ストーブの灯油を補充したり。私はその間、溜まっていた宿題を炬燵の上に広げた。来月には、最上級生になる。模試の回数は増えて、将来に関する話題も現実味を帯びていくんだろう。

炬燵に足を突っ込みながら、しばらく英語の問題集に集中した。仮定法の文が交じる長文問題に頭を抱えていると、すぐ側で足音が止まった。

「うわあ、難しそう」

顔を上げると、ゴム手袋を嵌めた青葉さんが宿題に目を落としていた。

私は苦笑いを浮かべ、一度大きく A。

「知らない英単語が多くて、辞書引きながら解いています」

「少し休憩したら？ ココアか紅茶でも淹れよっか？」

「それじゃ、ココアで」

まるで青葉さんの自宅に、私がお邪魔しているような会話だった。数分後に再び現れた彼女は、湯気の上がるマグカップと個包装されたクッキー三枚をテーブルの上に置いた。

「このクッキー、ファミマで売ってた春の新作なの。一緒に食べよう」

「ありがとうございます。ちょうど、甘いもの欲しかったんですね」

青葉さんも一息吐くように、炬燵に足を入れた。ココアの甘い湯気の向こうで、一度大きく欠伸をする可愛い表情が覗く。

「そういえばさ、小羽って進路は決めているの？」

「一応、ここら辺で就職を考えてます」

「そっか。進学はしないんだ？」

「うーん。学費だって掛かるし」

「奨学金制度とかも、あるじゃない」

ココアを少し口に含んだ。甘いはずなのに、熱さしか舌に伝わらない。

「だとしても、無理ですよ。お母さんがいるんで」

四月の中旬には、進路希望調査が控えている。担任には、地元のスーパーか石巻の水産加工工場への就職希望を伝えるつもりでいた。

「進学したいなって思ったこともあったけど、大丈夫です。青葉さんもこうやって、遊びに来てくれるし。今の生活は、以前より楽しいもん」

「何言ってるの。わたしなんか、いついなくなるかわかんないのよ……」

青葉さんは目を伏せて、炬燵布団の解れた糸を弄っている。どうしてか、今の返事の語尾は弱々しかった。

「えーっ、ずっとこの町にいて下さいよ」

「うーん……どうだろうね」

「青葉さんがいなくなったら、私泣いちゃう」
冗談めいた口調で、本音をぶつけた。青葉さんと出会って、他人に甘えることを知れた。誰かにもたれ掛かれれば気持ちが悪くなると思っていたけど、それは誤解だった。甘えれば甘えるほど、凄く怖くなる。こんなにも頼りになって大好きな人が、いつか私の目の前から消えるかもと想像するだけで胸が締め付けられる。青葉さんは苦笑いを浮かべながら、隅に避けた教科書に目を向けた。

「進学したかったのは、大学？」
質問を聞いて、温かいマグカップをテーブルに置いた。

「いえ、専門学校です」

「へえ、どんな？」

「看護師の……」

口籠もりながら、クッキーの包装を開けた。お母さんのことが切っ掛けで、看護師を目指したい時期が確かにあった。

「小羽は優しいし、びったりじゃん」

「そうですかね……」

「やっぱり、幼い頃からママさんのサポートをしてるから？」

「それもあるけど、原点はただの怒りだと思っています」

青葉さんが B 仕草を目にしながら、春の新作らしいラズベリー味のクッキーを口に運ぶ。甘酸っぱい香りが、私の吐息に交じる。

「おじいちゃんが入院していた病院で、看護師さんから嫌なこと言われ

ちゃって」

(中略)

口の中を満たしていたラズベリーの香りは消え、クッキーのカスが奥歯に挟まった。

「だから看護師になって、自分なりに患者さんとその家族の力になりたくて。私みたいな嫌な想いをする人を、減らしたいっていうか」

「小羽らしい、誠実な考えじゃない」

「でも、もう止めました。私の怒りって、あんまり長く続かないし」

看護師を一時目指して、結局諦めたのも、お母さんの影響だった。専門学校に通うとなれば、勉強や実習で今より確実に忙しくなる。帰宅するのは、夜になることが多くなるかもしれない。症状に波があるお母さんを、長い時間一人で家に残すことはできない。定時が決まっている就職の方が都合が良い。

「小羽は、本当にそれでいいの？」

「別に、本気でなりたいたと思った訳じゃないし。ほんの気まぐれで、考えただけですから」

弾んだ口調で、五ヶ月前の自分をいつわる。鎮火していた炎がまた燦り始め、無理やり消火するように話題を変えた。

(中略)

「小羽はさ、『津波でんでんこ』って知ってる？」

「知ってますよ。地震の後は津波が来るから、とにかく各自で逃げろっていう教訓ですよ。家族や友達にも構わずに」

でんでんこは、東北の方言で『各自』を意味する。港町では昔から、もし津波が来たら誰にも構わず各自でばらばらに高台に逃げると、教えられていた。要は、自分の命は自分で守れという教訓だ。

「わたし、その言葉を知らなくてさ。昨日の地震の時に、叔母さんが教えてくれたの」

「私は正直、その教訓が嫌いなんですよね。だって一人だけで逃げるって、なんか薄情じゃないですか。昨日も、まずはお母さんの様子を見に行つたし」

私が誘導しないと、お母さんはテーブルの下に避難することもできなかったし、倒れそうな家具の側から離れることもできなかった。身体を恐怖で振るわせ『プーちゃんが怒ってる』と、非現実的な言葉を繰り返していた

90

85

80

75

70

65

60

姿を思い出す。私にとつての『津波でんでんこ』は、防災訓練の時だけ聞く胸に響かない心構えだ。

「実はわたしも、叔母さんに同じようなことを言ったの。なんか、それって冷たくない？　って」

「やっぱり、そう思いますよね？」

「でもね、叔母さんはこう返したんだ。人間の心理として、誰かが一目散に逃げる姿を見せれば、必ず他の人も続くって。結果として、多くの命が助かる可能性が高まるって」

「まあ……そうかもしれないですけど」

「要は、逃げる背中が語るのよ」

青葉さんは戯けた口調で話を終わらせると、廊下に続く磨りガラスの格子戸を一瞥した。

「そういえば、しばらくママさんの気配がないね」

「多分、部屋で寝てるんじゃないですか。昨夜は落ち着かなくて、殆ど眠ってなかったし」

玄関を開ける音は聞こえなかったから、家の中にはいると思う。そんな予想とは裏に、嫌な漣が胸に広がる。

「一応、様子見てきますね」

私は気怠く立ち上がると、廊下に踏み出した。

「お母さん、ココアでも飲む？」

呼び掛けても返事はないが、三和土にはお母さんの汚れたスニーカーが並んだままだ。やっぱり、昼寝でもしているのかもしれない。

寝室に近づくと、襖の隙間から冷たい風を感じた。思わず、くら建て付けが悪くても、こんな隙間風を今まで感じたことはない。

「ねえ、入るよ」

一気に襖を開けた。まず目に飛び込んできたのは、乱れた寝具だった。お母さんの姿はどこにもない。窓が開けられ、カーテンが潮風に煽られ揺れているだけだ。

「あれっ……」

それから足早にトイレと浴室を見て回ったけど、結果は同じだった。不穏な気配を察したのか、居間から青葉さんが顔を覗かせた。

「ママさん、いた？」

「いないです。靴はあるんですけど、寝室の窓が開いてて」

120

115

110

105

100

95

そういえばさつき、窓から誰かが見ているという妄想を口にしていた。お母さんの思考回路はわからないけど、病的体験に左右されて突発的に外に飛び出した可能性は考えられる。

「どこ行つたんだろ……」

「家にいないなら、外を探してみよつか。そんな遠くには行つてないでしょ」

青葉さんの落ち着いた声に救われた。私は急いでダウンジャケットを羽織ると、汚れたスニーカーを片手に玄関の引き戸を開けた。

外は陽が落ち掛けていた。家の前から見える網磯漁港には、人影はない。もうこの時間は、漁は終わっているからだろう。船溜まりには係留された漁船が並び、静かな波を受けていた。

「まずは、近所を探そうか」

「それか……いつもの場所に、いるような気がします」

そう告げただけで、青葉さんは網磯漁港に向けて足を進めた。私も、カーキ色のブルゾンの後を追う。

網磯漁港の湿ったコンクリートの上に立ち、端にある突き出た防波堤に目を凝らす。遠くからでもわかるずんぐりとした背中を確認すると、安堵と呆れが交じった溜息が漏れた。お母さんはいつものお気に入りの場所で、造船所から伸びる赤と白のクレーンを眺めている。

「いましたね」

「良かったー。ママさんはやっぱり、あの場所が好きなんだね」

「裸足だし……本当に、何考えてるんだろう」

ガラスや釣り針を踏んで足を怪我でもしたら、病院に連れていくのは私だ。海から吹く冷たい潮風が、脇の下に滲んでいた汗を不快に冷やしている。

「お母さんー！ 何やってんのよー」

ここから防波堤までは、数十メートルの距離があった。大声で呼び掛けていると、さつきまでの心配が苛立ちに変わっていく。お母さんの変な行動のせいで、人気のない寒たい漁港に向く羽になった。まだ宿題も終わってないし、美味しいクッキーだって一枚しか食べていない。家に帰ったら、熱々だったココアは冷めきっている筈だ。

青葉さんが家事やお母さんの相手をしてくれるようになってから、一人で自由な時間を過ごす素晴らしさを知ってしまった。洗濯物を畳まなくて

いいし、夕食のメニューに悩むこともない。深夜に眠気と闘いながら、机に向かうことも少なくなった。自由な数時間は、自分のことだけを考えられる。一時だけ、お母さんの存在を忘れることができていた。

「小羽、その靴貸して」

防波堤に向かって歩き出そうとしたタイミングで、隣から淡々とした声が聞こえた。

「わたしが連れて帰るよ。小羽は家に戻って、勉強の続きしてな」

「えっ、別に大丈夫ですよ。ここまで来たんだし」

私が断つても、色白の手が汚れたスニーカーに伸びた。そのまま渡すと、当たり前に私の手が軽くなる。

「小羽」

青葉さんは私の名を呼んだきり、口元から八重歯を覗かせて黙り込んだ。切れ長な目元は、真っ直ぐに私を捉えている。彼女の背後には、藍色の空が広がっていた。見惚れてしまうほど澄んだ色なのに、お母さんのことを考えていたせいかな今になって気付いた。

「いつかちゃんと、手を離さないね」

海鳥の鳴き声や波音に掻き消されそうな、小さな声だった。私は何も持っていない両手を一瞥してから、顔を上げた。

「えっと……どういうことですか？」

「ママさんのこと。いつか手を離して、誰かにゆだねるんだよ。小羽には、小羽の人生があるんだから」

青葉さんがスニーカーを片手に歩き出す。徐々に離れて行く後ろ姿を目にしなが、胸の中がザラついた。

私に、私だけの人生があることなんてわかつている。

教えて欲しいのは、そんな綺麗事じゃない。手を離すための具体的な方法だ。生理前だからだろうか、青葉さんに対しても刺々しい感情が生まれていた。

私は家には戻らず、靴紐が揺れるスニーカーを目指した。青葉さんに追いつくと、カーキ色のブルゾン越しに腕を絡ませる。

「だったら、明日も来てくださいね」

青葉さんを試すような気持ちだが、言葉に変わった。彼女は少し黙ってから、**D**。

「明日は、厳しいかな。東京に行く予定なのよ……」

言い淀んだ返事を聞いて、心臓が強く鳴る。以前から何度か、東京に向かう理由を訊ねたことがあったけど、全てそれとなくはぐらかされていた。

「えーっ。手を離してゆだねろって言ったのは、そっちじゃないですか」

「うん……ごめんね」

「私たちを置いてくほど、大事な用なんですか？」

青葉さんを困らせるだけの質問だった。今日の私はどうかしている。たとえ普段より気が立っていたとしても、意地悪過ぎる。青葉さんは瞬きを繰り返すだけで、何も言葉を発しない。気不味くなった私は取り繕うように、なんとか戯けた雰囲気を出しながら口を尖らせた。

「さっきのアドバイスって、綺麗事だったりして」

「そんなことないよ。わたしはずっと、心底そう思ってる」

「本当ですか？ 大人は平気で、嘘つくからな」

ただ甘えようとしただけなのに、上手く行かない。まだ甘えることに、慣れていないからだろうか。私への愛情を確かめるように、⁽⁴⁾我が儘な言葉だけが口から零れ落ちてしまう。

「青葉さんも、お父さんと同じ。どうせ私たちを置いて、遠くに行くんだ」

「また、帰ってくるから……」

「どうだか。あーあ。嵐のお母さんと二人つきりは、キツいな」

これ以上言ったら嫌われる予感がしたけど、濁った言葉は止まらない。吐く言葉と、本音は真逆なのに。明日は予定通り東京に行って、凄く楽しんで来てほしい。こんな潮風なんかじゃなく、都会のビル風を感じながら一息吐いて来てくれたら嬉しい。

でも、あともうちょっとだけ、行くのを躊躇ってほしい。小羽は頑張っていると労ってほしい。何もなくても、頭をポンポンと撫でてほしい。明日は来れないから、今日は遅く帰るねと宣言してほしい。胸の中で一方的な『ほしい』だけが溢れ出していく。私はいつも貰ってばかりで、青葉さんに何も返せていないのに。

「ねえ、小羽。空が凄いいよ」

「あー、話を逸らしてる」

「だって、本当に綺麗なんだもん」

スニーカーを持ってない方の手が、前方を指差した。遠くに見える製紙工場の白い煙が、さっきより夜に近づいた空を霞ませている。防波堤の近くにいるお母さんは、まだ造船所に灯る明かりを眺めていた。⁽⁵⁾全てが藍色

220

215

210

205

200

195

190

に染まっているような時刻の中で、確かな寂しさを感じた。

(前川はまれ「藍色時刻の君たちは」)

問一

——(1)「青葉さんは目を伏せて、炬燵布団の解れた糸を弄っている。」とありますが、このときの「青葉さん」の心情はどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「私」の無邪気な表情を見ていると、いつかは離れなければいけないことがいつそう辛く思われるので、「私」から目をそらし、辛さを紛らわそうとしている。

イ「私」からいつまでもこの町にいてほしいとせがまれたが、もう支援を続けることはできないため、傷つけないように自分の事情を説明する方法を悩んでいる。

ウ「私」が自分の手伝いなしには進学できない事情を理解していても、赤の他人である自分には十分に支援することはできないと思い、もどかしく感じている。

エ「私」が自分を精神的な拠り所として頼りにしていることを理解しているからこそ、いつまでも支援し続けられるわけではないことをはっきりとは伝えづらく困っている。

問二

——(2)「無理やり消火する」とありますが、これはどういうことですか。「私」の心情をふまえて、三行以内で説明しなさい。

(二) 「火」という字を含む次のⅠ～Ⅲの成句において、それぞれの

Ⅰ ⅠⅢに入るふさわしい漢字一字を答えなさい。

Ⅰ ⅠⅠ 前の灯火(危険が迫っていて今にも滅びそうなさま。)

Ⅱ 火の Ⅱ (経済状態がきわめて苦しいこと。)

Ⅲ 火に Ⅲ を注ぐ(勢いの盛んなものに、さらに勢いを加えるようなことをする。)

問三

——(3)「胸に響かない心構えだ。」とありますが、「私」にとって「津波でんでんこ」が「胸に響かない心構え」であるとはどういうことですか。その理由も含めて三行以内で説明しなさい。

問四

あ・いに入る身体の部位を表すふさわしい漢字一字をそれぞれ書きなさい。なお「裏あ」とは、「正反対である」という意味で、「羽い」とは、「成り行きから生じた困った状況」という意味です。

問五

A ー D に当てはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～タの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上使えません。)

- | | | |
|------------|--------------|----------|
| ア 顔を出した | イ 首を長くする | ウ 背中を追った |
| エ 顔を擧めた | オ 首が回らない | カ 顔を合わせた |
| キ 首を突っ込む | ク 背伸びをした | ケ 息が絶える |
| コ 背筋が寒くなった | サ 息が合う | シ 首を捻る |
| ス 息を引き取る | セ 背に腹はかえられない | |
| ソ 息を呑む | タ 顔がほてった | |

問六

——(4)「我が儘な言葉だけが口から零れ落ちてしまう。」とありますが、それはなぜですか。このときの「私」の心情をふまえて、三行以内で説明しなさい。

問七

——(5)「全てが藍色に染まつているような時刻の中で」とありますが、この空の描写によってどのような効果がうまれていますか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わざわざ言及するほどに空の様子が美しいと述べることで、「青葉さん」が「私」の話を逸らしたことを正当化する効果。
- イ 藍色に染まる空に見とれる「青葉さん」と、美しさを感じる余裕のない「私」の差を描き、「私」の孤独を強調する効果。
- ウ いなくなつた母親を港で発見するまでに、空がすっかり藍色に染まりきってしまうほど長い時間がかかってしまったことを示す効果。
- エ 港町で育つた「私」には当たり前のことも、東京から来た「青葉さん」には目新しく、美しく映ることを示す効果。

問八

この小説は、家族の介護や日常生活の世話を過度に行なっている子どもや若者、いわゆる「ヤングケアラー」を登場人物として描いています。作者によるこの小説のあとがきの一節を読み、後の問いに答えなさい。

【あとがき】

ヤングケアラーたちは、今もどこかで確実に存在している。最近はやングケアラーに関して様々な議論が交わされているが、十分な支援があると胸を張れないのが実情だ。執筆中に一つだけ決めていたことは、⁽⁶⁾登場人物が抱く家族に対する感情を素直に描くということ。たとえそれがどんな歪んだ想いだったとしても、否定せずにまずはそのまま受け止める。個人的には現実世界でも、そんな姿勢が重要だと考えている。

最後に、この本を手にとってくれた皆さまへ。ヤングケアラーに対しては、信頼できる大人や安心できる居場所が必要不可欠だと個人的には考えている。この物語を読み終わった後に、子どもたちに向ける眼差しに新しい視点が加わっていたら幸いだ。誰かの困難のすべてを、解消することはとても難しい。だとしても、あたたかな眼差しを向け続けることで、誰かの辛さを和らげることができるかもしれない。

(一)

——「登場人物が抱く家族に対する感情を素直に描く」とありますが、本文に描かれていた、「私」が母親に抱く感情はどのようなものでしたか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 希望する進路を諦めざるを得ないなど、自分の自由が奪われていくように感じ、親として大切に思う気持ちよりも憎しみがまさっている。

イ 行方が分からなくなった母親を心配して探しに行くなど、その存在を大切に思う一方で、病気の症状に度々振り回される苛立ちも感じている。

ウ 自分の進路の決定などで、本来は母親に頼るべき場面で「青葉さん」に意見をもらわなくてはならないなど、頼りなさを感じている。

エ 病気による幻覚や妄想に苦しめられてはいても、心の中では娘である自分を愛してくれているはずだと思い、信頼している。

(二)

【あとがき】に述べられている筆者の意見を踏まえて、Aさん～Dさんが次のように話し合いました。Aさん～Dさんの中で、筆者の意見を正しく理解し、作品本文の読解に最も活かしていると考えられるのは誰ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさん 筆者は、ヤングケアラーの抱える困難は信頼できる大人からの支援によってすべて解消できると述べています。だからこそ、作品の中で「青葉さん」は「私」に「母親から手を離さない」と伝え、「私」が母親のもとを離れられるよう勇気づけようとしたのではないのでしょうか。

イ Bさん 筆者は、ヤングケアラーが家族に抱く、憎しみや恨みといった負の感情を、周囲が理解することが大切だと述べています。作品の中で「私」は母親への苛立ちをはっきりと自覚している様子はありますが、「青葉さん」はそれに気づき、積極的に声をかけ、寄り添おうとしています。

ウ Cさん 筆者は、ヤングケアラーの辛さは、あたたかな眼差しを向けてくれる存在によって和らげられるかもしれないと述べています。作品の中で「青葉さん」の声をかけ「私」は素直に受け入れられてはいませんが、「青葉さん」が「私」にとって心のよりどころになっていると言えそうです。

エ Dさん 筆者は、ヤングケアラーが家族に抱く憎しみや恨みといった感情を、周囲が否定しないことが大切だと述べています。作品の中で「私」は母親へのいら立ちや嫌悪を素直に「青葉さん」に表現することができていて、「青葉さん」に対する「私」の強い信頼を読み取れます。

